2023 年8月27日 久宝教会 礼拝メッセージ

「みんな『小さい人』だった」　　牛田匡牧師

聖書　出エジプト記　23 章 9−13 節

ルカによる福音書 14章 1−6節

今日は聖書を「出エジプト記」からと「ルカによる福音書」からと、2つの箇所から読みました。特に「ルカによる福音書」の方のお話は、聖書協会共同訳では「安息日に水腫の人を癒やす」という小見出しが付けられているお話ですが、それを聞くと、先週の礼拝で読んだ箇所と何だかそっくりなお話だと、お気付きになった方もおられるかもしれません。先程読んだのが 14 章のお話ですが、ページをめくって 13 章に戻って頂くと、「安息日に腰の曲がった女性を癒やす」という先週のお話が目に入ります。

「働いてはいけない」とされていた安息日に、目の前にいる病気の人に手当てをすることは、ふさわしいことなのか、ふさわしくないことなのか。律法的に許されているのか、許されていないのか。律法をよく学び、律法を厳密に守ろうとしていた律法の専門家やファリサイ派の人たちは、「当然、安息日なのだから治療行為は慎むべきである」と考えていましたが、イエス様は目の前で困っている人の必要を優先させることこそが大切だと言われました。そのように当時の社会の中で、常識、当たり前と思われていた考え方に、正面から反対するイエス様の斬新で、画期的な言動は、権力者や指導者からは煙たがられ、社会の中で差別され、のけ者にされ、小さくされていた人たちからは、歓迎されました。だからこそ、様々な人々の心に刻まれ、記憶され、口々に語り継がれて行ったのだと思われます。13 章と 14 章に、このように似たようなお話が続いて記されているのも、そのような多様な言い伝えがあったということなのでしょう。

それにしても、律法的、宗教祭儀的に「清いか、穢(けが)れているか」ということに厳格だったファリサイ派の人たちの食事の席に、水腫を患っている人が一緒に着いていたということ自体が、本当にあり得たのかどうかは分かりません。「水腫」というのは、具体的にどのような病気なのかは分かりませんが、名前から想像するに体の中に水が溜まる病気だったのだろうと考えられています。そのためにこの人は外見的にも病気であることが明白であり、そのような場合は祭儀的には穢れていると見なされるので、通常は関わってはいけない、一緒に食事をしてもいけないとされていました。ですから、イエス様を食事に招待した律法の専門家やファリサイ派の人々は、そのような病人をあえて連れて来て場面を設定し、その上でイエス様がどのように振る舞われるか、様子を伺っていたというわけですから、要するにイエス様の揚げ足を取ろうとしていたのでしょう。そのように考えると、相当に悪趣味で意地悪だと言わざるを得ません。

しかし、イエス様はそのような魂胆も見透かして、迷わずに水腫にかかった人をつかみ、引き寄せ、抱きしめられました。そしてそれを見ていた人たちに言われました。「あなたがたの中に、自分の息子か牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか」（5）。そして、その問いかけに反論する人はいませんでした。つまり、安息日規定という律法を守ることよりも、命を守ることの方が優先されるということは、誰もが知っていることであり、実際に行われていることだったというわけです。

そもそも、安息日規定とは何か。何のために安息日の規定が設けられているのか、ということについて述べられているのが、「出エジプト記」23 章の 12 節です。「六日間はあなたの仕事をし、七日目には休みなさい。そうすれば、あなたの牛やろばは休みを得、女奴隷の子や寄留者は一息つくことができる」。その前の 10 節、11 節には安息年として、土地や畑についても、7 年目には休ませなさいと記されています。それらは何のためかというと、自分たちが収穫して、食事の糧を得て、富を得るというだけではなく、「あなたの民の貧しい者が食べ、その残りを野の獣が食べることができる」（11）ようにするためだと言われています。なぜならば 9 節ですが「あなたは寄留者を抑圧してはならない。あなたがたは寄留者の気持ちが分かるはずだ。あなたがたもエジプトの地で寄留者だったからである」……。

古代イスラエル民族とは、どのような民だったかというと、それは「出エジプト記」に記されている通り、古代エジプトでピラミッド建設などの過酷な重労働を強いられていた奴隷であった所から、神によって導き出され解放された民というのが、その定義です。「あなたたちもエジプトの地で、寄留者（難民）だったのだから、何も持たない、全てを失っている寄留者の気持ちが分かるはずだ。だからこそ、寄留者たちを抑圧することなく、保護しなくてはならない」……。それが安息日規定、律法の根本的な精神でした。ですから、社会の中で弱く、小さくされている人の必要を優先することは、律法の本来の精神、目的に適っていることでした。

それにもかかわらず、その精神が見失われ、誤解、曲解されたまま人々に告げ知らされ、指導されている現実がある。社会の中で病気の人や、貧しい人や、差別されている人々が、さらに抑圧されている現実がある。イエス様はそこに怒りを覚えられ、毅然として対峙されました。そのことからも、如何に指導者と呼ばれる人たちや、人の上に立つ権力者たちの責任は重いか、ということが言えるかと思います。なぜ、人の上に立つようになると、根本的な方向性を、見失ってしまうのでしょうか。

「ヘブライ語聖書」の中には、神様から使命を与えられた数々のリーダー、民の指導者や王たちが描かれていますが、最初から最後まで理想的な指導者として描かれている人は少なく、多くの人々が過ちを犯したり、失敗したりする人物として記されています。だからこそ読み物、文学作品としても面白いわけですが、それ

は単にどんな人間でも弱さや足りなさを持っている、ということを表しているだけではないように思います。とりわけ無名だった頃には、神様の命令に従い、民を導くために一生懸命だったのに、次第に有名になり、指導者としての地位も権力も得ていくに連れて、いつの間にか神様から離れ、権力に固執し、誤った方向に政治を行ってしまうというような姿が見られます。そしてそれは、今から何千年も昔の「ヘブライ語聖書」の中だけではなく、数十年前や 100 年前、数百年前の、いわゆる「近現代」と言われる時代においても、歴史を見ると明らかではないでしょうか。それを人間の「性(さが)」や「業(ごう)」と呼ぶのかもしれませんが、私はそれらの根底にあるのは、「恐れ」「恐怖心」なのではないかと思っています。

聖書は言います。「あなたたちもエジプトの地で寄留者だった」。みんな赤ちゃんとして生まれて来たときには、裸で何も持たずに生まれて来て、自分の力だけでは数時間と生きられない無力な存在として生まれて来ます。そして生きている間に、次第に身体も大きくなり、力も強くなり、出来ることも増え、様々なものを手に入れていきますが、やがてこの息を引き取り、神様の御許に帰る時には、また何も持たずに帰って行きます。「ヨブ記」の中には、「私は裸で母の胎を出た。／また裸でそこに帰ろう」（1：21）という言葉がありますが、理屈では分かっていたとしても、心と体はそうはついていかないというのが現実なのではないでしょうか。年齢を重ねていくうちに、段々と体が動きにくくなり、病気がちになり、出来ていたことが出来なくなり、記憶も忘れることが多くなり……。それらは寂しいこと、悲しいことであり、これからどうなっていくのか分からないという怖いことでもあるのだと思います。

何も持っていない時には、「神さまが一緒にいてくださる」というだけで、他には怖くなかった。それなのに、多くを手に入れた今は、それらが失われてしまうことを恐れている。「神様が一緒にいてくれるなら、それらが失われることはないのではないか」とさえ思ってしまう。それらが「失われて行くということは、神様からも見放されたということなのか」とすら考えてしまうかもしれません。そのような恐怖心が、私たちの判断を鈍らせ、道を誤らせてしまうのではないかと思います。

聖書の中で、様々な人々の口を通して、何度も何度も語られている言葉の一つが、「恐れることはない」「怖がることはありません」という言葉です。裏を返せば、それだけ人間はビクビクしやすい生き物だということなのでしょう。裸で生まれ、裸で神様の御許に帰って行く私たちです。今、どんなに多くのものを持っていても、どんなに立派な地位を得ていても、みんな初めは弱く小さい人でした。そして再び、段々と弱く小さくされていきます。

「あなたたちはエジプトの地で寄留者だった」……。だからこそ孤児、寡婦、寄留者、病気の人など、社会の周辺に追いやられた人たち、差別されている人たち、弱く小さくされている人たちを大切にしなさい。あなたたちにはその気持ちが分かる

はずだから、大切にすることが出来るはず。今持っているものを失うことを恐れないで。自分が穢れることを恐れないで……。安息日の振る舞いを通して、イエス様が伝えたかったことも、そのようなものだったのではないかと思います。

先日 24 日から、福島第一原子力発電所から放射性廃棄物である汚染水の海洋放出が始まりました。どれだけ薄めても、海中に放出される放射性廃棄物の総量は変わりませんし、海の中の生き物たちによる食物連鎖の中で、汚染濃度は濃縮されて行くということも、これまでの研究、歴史から明らかです。それにもかかわらず「汚染水」を「処理水」と呼び換え、漁業関係者や周辺住民の方々の理解を得ていないにもかかわらず、説明責任を果たして理解を得たということにされてしまっています。今もなお多くの人たちが反対の声を上げ続けていますし、これからも注意して行く必要があります。2011 年の核事故直後から発令された「原子力緊急事態宣言」は、12 年が過ぎた今もなお解除されていませんし、福島第一原発の廃炉作業はまだ何も始まっていないに等しい状況です。それらを忘れたい、無かったことや終わったことにしたい、というのは、真実や事実に目を向けたくないという恐怖心、恐れから来る思いなのだろうと思います。政治家や現場の責任者は、あと数年で交代して、責任から逃げ切ることが出来るかもしれませんが、汚染された現地は何十年も何百年、何千年と続いて行きます。

人類の長い歴史の中で、恐怖心から解放されて生きられた人たちの数は少なく、大多数の人たちは恐怖心に捕らわれながら生きて来たのだろうと思います。人々に恐怖を与えるものは様々なものがあります。大雨や洪水、旱魃、地震、飢餓などの天災もそうですし、人と人とが命を奪い合う戦争もそうです。理解することができない理不尽な現実や圧倒的な出来事を前にして、人々はそれらを見て見ぬふりをして、無かったかのように蓋をして、忘れたもの、終わったものだと自分自身で思い込んで……。そうやって飲み込んだ恐怖心は、自分の理性や意識を越えて、無意識のうちに周囲の人々や社会に対する暴力となって発現して暴走していきます。現代の社会が、物質的には豊かであるのに、何だか生きにくい、息苦しく感じるのは、そのようにして生み出され続けた暴力や攻撃性、ハラスメントが社会の中に渦巻いているからではないでしょうか。

だからこそ聖書は何度も「恐れてはならない」と訴えます。現実から目を逸らさないで、今ここから神様と一緒に立ち上がろう。仲間たちと一緒に歩み出そう。みんな小さい人だった、それでもこうして生かされて来たじゃないか。だから、あなたも、あなたの隣にいる小さい人を大切にしてみてください。そしてあなた自身の中にいる小さい人も大切にしてみてください。恐怖心に捕らわれてしまわないように、神様が共にいてくださるということに信頼して、私たちは今日もここから歩みを進めて参ります。